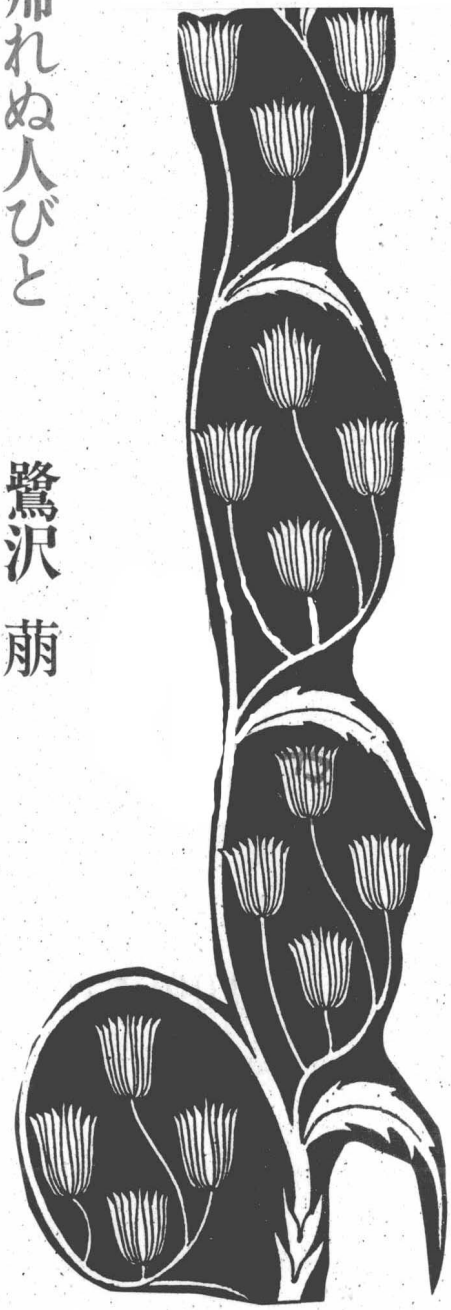
帰れぬ人びと

鷺沢　萠

帰れぬ人びと

鷺沢　萠



文藝春秋

著者紹介

一九六八年東京生まれ。上智大学外国語学部ロシア語学科三年在学中。八七年、十八歳の時の作品『川べりの道』で文學界新人賞を受賞。家族という大命題を、繊細な感性でみごとに捉えて、「この若さで」と選考委員を驚倒させた。以来、本格派の女流新人として文芸誌につぎつぎと作品を発表、『帰れぬ人びと』で第一〇一回芥川賞候補に挙げられる。

帰れぬ人びと

一九八九年十一月一日　第一刷
一九八九年十一月二十五日　第二刷

定価はカバーに表示してあります

著者　鷺沢萠

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　大日本印刷
製本　中島製本

© Megumu Sagisawa 1989 Printed in Japan

ISBN 4-16-311300-2

万一落丁乱丁のあった場合はお取替いたします

目次

川べりの道　5
かもめ家ものがたり　39
朽ちる町　95
帰れぬ人びと　149

装帧

司

修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

作品集

帰れぬ人びと

川べりの道

川べりの道は長かった。

実際には、さほど遠い距離ではなかったのかも知れない。しかし十五歳の吾郎には、ゴム底の運動靴の足の裏に感じられる尖った小石の感覚は、ある哀しさを伴って伝わった。

やがて吾郎は、川の表情は季節ごとに変わるということを発見する。夏はそこら中に繁ってむせかえるような草の中に、都会育ちの吾郎はずっと以前に訪れたことのある母の郷里の田圃道の匂いを見つけた。冬は空気の冷たいせいか、くっきりと見える川むこうの工場街を眺めながら、吾郎は重たいオーバーのポケットの中で幾度も手を握りしめたり開いたりしながら川べりの道を歩いた。

毎月毎月同じ日にこの川べりの道を歩くと、たったひと月のあいだで随分と風景が変わってしまうことにも驚かされた。川むこうの工場街の屋根屋根にかかる靄の色。土手道と呼ばれる堤防の上の道から川へと続く斜面をおおう雑草の色——。ひと月のあいだで様変わりしてしまうそれらの風景をぼんやりと眺めながら、吾郎はおなじみになった土手道を歩くのだった。

トラックや自家用車が茶色い煙をたてて通る大きな橋を過ぎると、吾郎は土手道を下りてごちゃごちゃした住宅街に入る。そこは細い路地が碁盤の目のように交差し、曲がった先曲がった先に似たような軒先の見える、小さな町である。

知らない家の粗末な板塀のすぐ脇を通ると、赤ん坊の泣き声が聞こえてきたりすることがある。男女のいさかう声や、電話の呼鈴であることもある。そういったものを聞くと、吾郎は胸が圧されるような気分になって、つと後を振り向く。そうしてその家の窓が、テレビの画面を映して赤くなったり青くなったりしているのを見ると、なぜか安心してまた前を向いて歩き出すのである。

そんな雑然とした小さな町の片隅、緑色の三輛電車が轟々と過ぎるちっぽけな踏切のすぐそばに、吾郎の父親が女のひとと暮らしている家がある。

吾郎は毎月同じ日にその家を訪ねるが、玄関の土間に女のひとの方が顔を出すことは滅多になかった。大抵は父親が扉を開き、軒下の薄暗い電灯に照らされて所在なげに佇んでいる吾郎を見ると、「あン」とか「おう」とか短い声を出した。父は吾郎に「上がれ」と顎で示すこともあるし、近くの児童公園まで吾郎を連れ出すこともある。どうやら吾郎がその家に上がれるのは、女のひとの不在のときに限られるらしかった。

吾郎を家に招き入れることができる日は、父は吾郎を奥の茶の間に坐らせる。何もいらないと言っても、父は台所からジュースやら煎餅やらを運んで来て吾郎の前に並べる。そして顔中に深く皺を刻ませ、吾郎の顔を見る。学校はどうだ、とか、吾郎の姉の時子は元気か、とか、成績はいいか、とか、父の訊ねることは毎月決まっている。吾郎は畳の上で足をむずむず動かしながら、いちいち「うん」と頷く。

吾郎にしてみれば、女のひとが今帰って来るかと気が気ではない。早く帰りたくてうずうずしてくる。

不思議に思うのは、あの川べりの長い道を歩いている間は、早く父に会いたくて、というより早くこの家に着きたくて仕方がないというふうなのに、この家に着いた途端、早く帰りたいという気持ちでいっぱいになってしまうことである。早く役目を果たして、そし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

て来月までは自由の身だ。――そんな気持ちにさえなるのである。茶の間の畳に坐った瞬間、時間が経つことだけを念じてしまう自分を、吾郎は奇妙に思う。

父の話に一段落つくと、吾郎は次に父が口を開く前に立ちあがる様子を見せて言う。

「じゃ、俺もうそろそろ……」

その一瞬に父の見せる表情を、吾郎は何と形容していいか判らない。口を少し開けたまま、父は空洞のような目をする。それは残される者の不安とも、残る者の安心とも言える。鼻づらを突然はたかれたかのような顔をして、父は「そうだな」と不興そうな短い声を出す。

吾郎は玄関の上がり框に腰かけ、わざと時間をかけて靴のヒモを結ぶ。そうしている間に、父が後から封筒を持ってバタバタとやって来る。

「それじゃあ」

そう言って吾郎が土間に立つと、父は精一杯さり気ないような声で言う。

「忘れるとこだった、コレ」

その言葉は、父が唯一自分から示す父の感情である。「忘れるとこだった」さり気なく言うことで、父は吾郎がこの家を訪ねるのは、決してこの封筒のためだけではないのだ、

ということを自分に納得させているようでもあった。封筒の中には、吾郎と姉の時子の、ひと月分の生活費があるのだ。

吾郎は曖昧な返事をして封筒を受け取ると、扉を開けて表へ出る。大仰に頭を下げて感謝することも、やれと言われれば吾郎にはできる。しかしそうすれば、父は情ないほどに悲しい顔をするであろう。吾郎はそれを知っていた。かと言って無言のままぶっきらぼうに受け取ったのでは何か格好がつかない。それで吾郎はもごもごと口の中で不明瞭なありがとうを言う。

「時子に、体に気をつけるようにってな」

吾郎の後姿に向かって父は声をかける。吾郎の姉の時子は、中学校に上がるころまですぐに風邪をひき、熱を出しては学校を休んでいた。そのころの時子のイメージが、父にとっては強いのであろう。今の時子からは、そんなことは想像しにくい。

半ば振り返って父の言葉に頷き、軽く手を挙げると、あとは堪まらなくなって吾郎は駆け出す。いまいましいほど愚鈍な緑色の三輛編成の電車が、すぐそばの踏切を轟音を立てて通り過ぎてゆく。

毎月一度のこの役目が、どういうわけで自分に押しつけられてしまったのか吾郎には判

らない。ただ姉の時子が言うほどには、父が女のひとと暮らしている家を訪れることに嫌悪を感じてはいなかったし、何よりもそんなことで姉と言い争うことを考えると、あきらめ半分で毎月同じ道を歩いた。吾郎にとって、あの川べりの道は、自分とか姉の感情などというものを遥かに越えたところに超然と存在しているのであった。

早く言えば吾郎はあきらめのよい性格である。かなわないと判っているものに抵抗して徒らに時間を費やすのは、馬鹿げているというよりも自分で哀しくなってしまう。学校の友人に、お前はさめてる、と言われたことがあった。吾郎はそのとき、なぜだか心の中で「ヤバいな」と呟いた。自分だけの秘密であるはずの、たちの悪い趣味を見つけられたような気がした。そう言われてみれば、吾郎はいつも自分を偽っているような気がする。意識しているわけでは決してないが、クラスの友人のくだらない冗談に大笑いしたりするとき、ふと、何ともいえず自分が情なくなることがある。だからと言って吾郎は友人たちを子どもっぽい、などと思うことはまるでなかった。むしろ羨望に近いような気持ちで、自分の周囲の少年たちを眺めていた。

学校での吾郎の評価は、まあまあというところだった。勉強も、とびぬけてできるというわけではないが、まるっきりできないわけではない。得意なものはこれといってないけ

れど、全て一応人並みにはこなす。友人関係にも生活面にも問題はないし、教師から見れば扱いやすい存在なのかも知れない。

「あんたはね、公務員にムイてるわよ」

保護者面接から帰って来た時子が、吾郎にそんなふうに言うことがあった。

「家庭環境のわりにはまっすぐ育ってらっしゃいますね、だってさ。失礼しちゃうわよ全く。よっぽどハンドバッグで横っ面ひっぱたいてやろうかと思ったわよ」

時子が真剣に憤慨していても、吾郎はちょっと笑ったまま黙っている。それよりも、自分がそのように可もなく不可もなくといったような性格であるのは、あの川べりの長い道のせいだというような気がしてならない。

父からお金を受け取る方法を、どうしてもっと別のものに変えないのかと考えたことがないわけではない。毎月家まで訪ねて取りに行く、というのは、どう考えても面倒だし、父が別の女と生活していることを考えれば尚更に奇妙なことではある。しかし間もなく吾郎は、それが時子の父親に対する精一杯の嫌味であることを知った。それを知ったとき、吾郎はたとえようもない、嘔吐感にも似た嫌悪をおぼえた。姉である時子に、理性とか意志というものの入りこむ隙を与えない何とも膠着的な女を感じた。

時子と吾郎は母親が違う。時子を連れて父が再婚し、間もなく吾郎が生まれたのである。生後すぐに実の母親を失くした時子は、継母である吾郎の母によくなついた。だから吾郎が生まれたとき、時子は吾郎をひどく憎らしく思ったと言う。八つ違いの腹違いの弟に、底意地の悪いいたずらをしたこともあると言う。吾郎にはそんな覚えはないが、そのときの幼い時子の心情を思うと、なんだか苦しい気持ちがする。時子のことを、不運な女だと思わずにはいられない。悪い親のもとに生まれた。そして恐らくは確実に胸のうちにしこりを残しているだろう思い出のある異母弟と、ふたりきりで暮らさなければならないはめになっている。

吾郎の母は、気持ちのしっかりした人間だったから、というよりも、ぼんやりとした鈍い感じの女であったから、吾郎が生まれた後でも時子に対する態度を変えるようなことはなかった。しかし吾郎は、時折感じられる時子の何とも女くさい性質に触れると、「血」というものを感じてしまう。吾郎の母は、気の弱いおとなしい人間で、なりふり構わずに他の女と争ったり、ということができなかった。送金してもらうか振込みにしてもらえば済むことなのに、毎月毎月別の女と暮らす父のもとへ吾郎をさし向けるような時子の勁さはどこから来ているのかと考えるとき、吾郎は時子の中に流れる、自分とは異なる半分の

血を思わずにはいられない。時子の実の母親がどんなひとであったのか吾郎は全然知らないけれど、そのひとは時子の中で確かに生きているような気がする。

吾郎にとっては、父や、父と一緒に暮らしている女のひとのことなど、もうどうでもよかった。父がその女と一緒になるために、二人の子供と母を残して家を出て行ったすぐあと、吾郎の母は国道でトラックにはねられて死んだのだったが、そのことにも吾郎は時子が口ぐせのように言うほど父に責任があるとは思わない。時子は、それは父が出て行ったことで錯乱した母の自殺なのだと言うが、母の死は誰が見ても運転手側の不注意がひき起こした事故であった。

母の葬儀にあらわれた父を、まだ高校生だった時子が声を震わせて追い返した。そのときも吾郎は、戸口のかげでどうすることもできずに、父と姉の様子を見まもっているだけだった。が、そのときの時子はやけに綺麗だった。口唇の端を歪めて父の顔を見あげ、興奮のためにときどき声を裏返しながら喋っていた時子の横顔は、あとにもさきにもないほどに美しかったと吾郎は思う。

「吾郎くんは、お姉ちゃんに感謝せにゃならんぞ」

事情を知っている父の友人だった男に、そう言われたことがある。それは確かにその通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook